

日本におけるリレーションシップ・バンキングの展開 —支店銀行化の関連で—

靄見 誠良

〈要旨〉

本稿の目的は、日本においてリレーションシップ・バンキングがどのように展開し、トランザクション・バンキングへ向かったのか、その歴史的な俯瞰を試みるところにある。

いま戦後の銀行システムは、大きな構造変化を迫られている。戦後の都銀と地銀、それに信用金庫、信用組合からなる秩序化されたピラミッド構造は崩れつつある。まさしく銀行合同の季節を迎えつつある。構造変化がどこに帰着するかは今のところ予想もつかない。行く方を占うには、変化の動因を構造的に探る必要がある。そのためには理論とともに歴史、過去の経験をひもとくことが求められている。本稿は、支店銀行化と支店管理組織に焦点を置き100年を超える普通銀行の経営軌道に光を当てる。それを通して銀行と地域コミュニティとのかかわりを明らかにする。

本稿は、共通論題「金融再編と地域公益—歴史的観点からの試論」の一部である。100年に及ぶ普通銀行の歴史を振り返ると、1930年から45年に及ぶ銀行合同を分水嶺として二分される。2,000を超える自由な分散型の市場構造から、80に絞り込まれた秩序ある集中型の市場構造に転換を遂げた。銀行の規模は大きく拡大し、それに伴い地域社会とのかかわりも大きく変化した。地域とのつながりは村町や郡から県へと広がり、それに伴い地域への貢献のありようも変化した。本稿では「地域公益」の問題を巡って、リレーションシップ・バンキングの観点から日本における地域銀行の変貌を見直すところにある。

本稿は2つの部分からなる。海外の研究と日本についての研究である。はじめにリレーションシップ・バンキングRB とトランザクション・バンキングTB を巡るこれまでの議論を金融史の視点から整理する。1でリレーションシップ・バンキング論の問題点を英米の歴史研究を基に検討し、リレーションシップ・バンキングからトランザクション・バンキングへ向かう6つの段階からなる発展モデルを提起する。2ではこのモデルを基に、日本においてリレーションシップ・バンキングがどのように展開したか、その経路を概観する。戦前の銀行システムは1920年代を境に二分される。両者を分ける分水嶺は預金=支店銀行の展開であった。そこで3において、前半の地域に根ざした株式=合本銀行を取り上げ、それが地域循環型の銀行であったことを明らかにする。つづく4において、支店銀行化に伴い本支店組織がどのように形成されたか、安田と十二銀行の2つの事例を取り上げる。5では、こうした本支店組織の整備とともに銀行の審査方法がどのように変化したか、当時の雑誌や刊行物の論調を通して概観する。最後に6で、日本におけるリレーションシップ・バンキング

発展モデルとして，明治期と昭和期を対比する．

(法政大学)

©Japan Society of Monetary Economics 2021